

藤心陣屋があった場所について

2022.8.3 高橋 眞

1. 藤心陣屋跡の案内板の記述

藤心陣屋があった場所について、陣屋跡に建つ柏市教育委員会作製の案内板では次のような表記となっている。以下引用。

「現在、畑地となっているこの場所には、江戸時代に徳川家康に仕えた本多侯の陣屋（代官所）が置かれていました。

『土村誌』には、「陣屋跡 藤心字大宮戸二百七十番ニアリ。里人御代官跡又ハ御役所跡ト称ス。維新以前本多紀伊守ノ配下ニ属スル役所アリタル処ニシテ、明治二年ノ建物ヲ取払ヘリ。（後略）」との記述がみられます。」（写真1,2参照）



写真1. 陣屋跡の石柱と案内板



写真2. 案内板（拡大）

2. 『土村誌』の中の陣屋跡に関する記述

『柏市史 資料編Ⅱ』に収録されている『土村誌』の「第十七章 名勝、旧跡、什宝 第三節 旧跡 一、陣屋跡」の全文は次のようになっている。以下引用。

「一 陣屋跡 藤心字大宮戸二百七十番ニアリ。里人御代官跡又ハ御役所跡ト称ス。維新以前本多紀伊守ノ配下ニ属スル役所ノアリタル処ニシテ、明治二年其ノ建物ヲ取払ヘリ。現今畑トナリ居レドモ、往時ノ陣屋ノ地形ハ略存ス。（下総輿地全図、下総旧事考等参照）」

（写真2の案内板では、「明治二年ノ建物」となっているが、『土村誌』原文では「明治二年其ノ建物ヲ」となっており、案内板は作製時の誤記と思われる。重要なことではないが）

上記のように、案内板及びその表記の基になっている史料『土村誌』からは、陣屋のあった場所として次の3点の情報が読みとれる。

- ① 「藤心字大宮戸二百七十番ニアリ」（案内板、『土村誌』）
 - ② 「現在畑地となっているこの場所に（略）陣屋が置かれていた」（案内板）
 - ③ 「現今畑トナリ居レドモ、往時ノ陣屋ノ地形ハ略存ス」（『土村誌』）
- まずは、この3点について調べてみた。

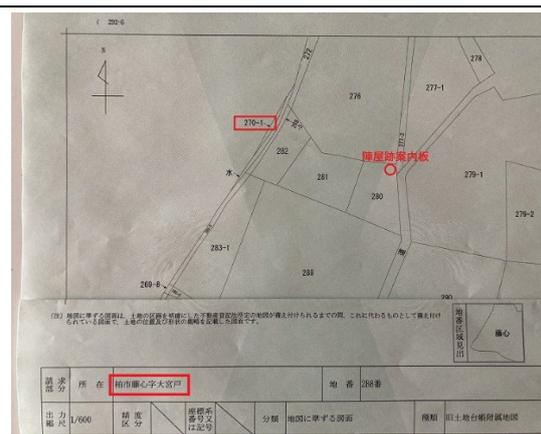
3. 上記2-①「藤心字大宮戸二百七十番」について

Google マップで「藤心陣屋跡」を検索すると住所は「藤心280」となっている。「大宮戸」は旧字名と思われるので、家にある古い道路地図を見ると「大宮戸」の表記があった。（地図1参照）また、柏市立図書館に行ったついでに、参考までと思い、柏法務局に寄り、地図1の表記にある288番地（隣接する民家の番地）の公図を取って見たところ、なんと住所表記が「字大宮戸」のままだった。（「原図」は昭和53年12月13日付となっている）尚本公図には「270-1」という番地の表記も見えるが、『土村誌』が編さんされた大正5年時と番地が同じかどうかは未確認。（地図2参照）

以上により、番地は別として、陣屋跡の案内板周辺が「藤心字大宮戸」であることは確認できた。



地図1. 『千葉県道路地図』1996年9月版より



地図2. 藤心陣屋跡周辺公図より

4. 上記2-②、③「現今畑トナリ居レドモ、往時ノ陣屋ノ地形ハ略存ス」について

案内板にある「現在畑地になっている…」という表現は、『土村誌』にある上記の表現を基にしたものと思われる。この表現からすると、案内板周辺の畑地が陣屋のあった場所と思われるが、何か史料がないか、柏市立図書館で探してみたところ、『大津川を歩く—神明社と藤心役所 歴史散歩 No.5』という小冊子を見つけた。そしてそこに陣屋の「絵図」のようなものが描かれてあった。（写真3,4参照）

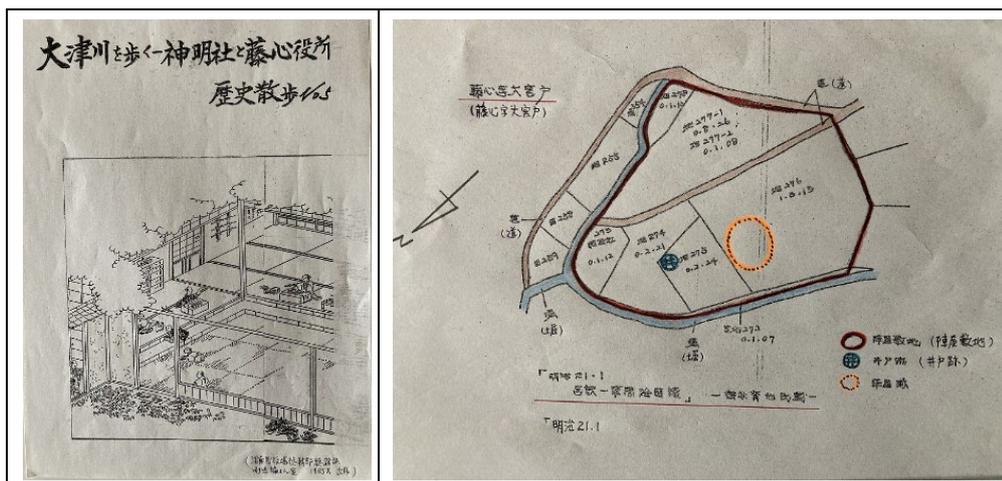


写真3. 「歴史散歩 No.5 大津川を歩く」表紙

写真4. 「歴史散歩 No.5 大津川を歩く」より

これは、「沼南町役場総務課町史編さん室 1985 年出版」となっており、旧沼南町の郷土史編さん室が開催した「史跡めぐり」のレポートと思われる。そして何より興味深いのは、その中に挿入されている「絵図の写し」（写真4）のようなもの。コピーのコピーと思われ、文字は不鮮明だが、読みとれるものは「絵図」に追記し、「陣屋敷地」、「井戸跡」、「堀」、「道」は色分けしてみた。オレンジに色分けした部分は「**牢**屋跡」か？（文字が不明瞭で未確定）（写真4参照）

また、この「絵図の写し」のようなものを、東西南北を揃えて現在の地図と比較してみると写真5,6のようになる。現在の地形（写真6）とほぼ同じように見える。



写真5. 陣屋跡の「絵図写し」？

写真6. 現在の陣屋跡周辺(Google マップより)

(注：この写真の陣屋跡のマークは少し南にズレている)

色分けしてみると、最も興味を引くのは「堀」の存在。写真6の左下の民家の左（西側）のあたりから地図の上方（北）に伸びて、右下（南東）にぐるっと現在の道路に沿って、堀があったということだろうか？ あるいは現在の道路は堀を埋めて作った？

ということで、何か手掛かりがないか、現地調査を行った。

5. 現地調査

宗寿寺の駐車場に車を止めさせていただいて、陣屋跡案内板の周辺を歩いた。特に堀の痕跡を求めて。すると、写真5に描かれた「堀」に沿うように、今でも「水路」が存在していることを確認した。写真7は撮影した場所の番号表示。写真8以下はその写真。



写真7. 「堀の痕跡」場所写真の番号



写真8. 「堀の痕跡」場所①（八幡神社の下）



写真9. 場所②八幡神社下（鉄板のフタ）



写真10. 場所③民家畑下（幅が拡張、杭が見える）



写真11. 場所④民家畑下の杭。「水路境（界？）」



写真12. 場所④近く（「水界」の杭）

ここまでの写真では、八幡神社の下からガードレールの内側に鉄板のフタが現れ、民家の北側の畑の下あたりからはガードレールと民家下のコンクリート壁の間の幅が広がり、また「水路境」、「水界」などの杭が見られた。（これは地図2の公図からも読みとれる）

鉄板の下は明らかに水路になっているのが隙間から見えたが、写真がうまく写っていないので掲載していない。「水路境」、「水界」の杭からは、以前の水路がもっと幅が広がったことを示していると推測された。そして、この鉄板の下の水路は、一度地中にもぐり、⑤、⑥の地点で表に現れ、畑地東側からの水路と合流する。(写真 13、14 参照)

尚、畑地東側の水路は地表に現れているが、現在は幅も狭く、いかにも農業用の水路にしか見えないものとなっている。(写真 15 参照)



写真 13. 場所⑤、⑥水路合流地点



写真 14. 場所⑤、⑥水路合流地点



写真 15. 場所⑦畑地東側の水路 (左上の民家のところが陣屋跡案内板。水路はさらに南東方向へ伸びている)

以上、陣屋跡周辺の畑地を取り囲む「堀の痕跡」を実地調査したが、八幡神社の下から、用水路から引き込んでいると思われる水路が陣屋跡周辺をぐるっと囲んでいることを確認した。これが写真 4、5 の「絵図の写し」に描かれた「堀」の「痕跡」と言えるかどうかは、さらに確認が必要と思われる。しかし、上記写真 4 の「絵図の写し」のようなものには、出展と思われる「明治 21.1 □□-□□絵図帳 -□□育也氏蔵-」と読めるような記載があるし、この記事の筆者も文中で「これを書くにあたっては、柏市史編さん室の大関先生、塚崎地区の成川先生に貴重なお話を伺い大変お世話になった。」と述べており、規模の大小はともかく、「堀」があったことは事実ではないかと推察する。

(この点について、柏市文化課に問い合わせしてみたが、「この図面のもとになった史料は確認できませんでした」との回答だった)

柏市文化課のお墨付きはもらえなかったが、現地調査の結果としては、写真 4, 5 の「絵図」に描かれた「堀」と同様の位置に、現在も「水路」があることは確認できた。

6. 『研究紀要 28』の「藤心陣屋の位置」について

藤心陣屋跡や船戸陣屋跡をインターネットで検索すると、『房総における近世陣屋—研究紀要第 28 号』が出てくる。これは千葉県教育振興財団が平成 25 年 3 月に発行したもので、下総、上総、安房それぞれに存在した陣屋がまとめられている。

この『研究紀要』の中で、藤心陣屋の位置等については下記のように記されている。「位置 藤心陣屋は文献④(『柏市史』資料編二 土・千代田村誌のこと(筆者))に拠れば通称「御代官跡又ハ御役所跡」と呼ばれ、宗寿寺の北約 200m の大津川に面した低位段丘面にある。(中略) 規模 藤心陣屋は文献①(『千葉縣東葛飾郡誌』のこと(筆者))に「南相馬御役屋敷 坪数六百六拾四坪」(約 2,200 m²)とみえる。」

上記の記述内容について、それぞれ詳しく検討してみよう。

① 「宗寿寺の北約 200m の大津川に面した低位段丘面にある」という記述について

先に、「2. 『土村誌』の中の陣屋跡に関する記述」でみたように、『柏市史』資料編二の中の『土村誌』では「藤心字大宮戸二百七十番ニアリ」となっており、「宗寿寺の北約 200m の大津川に面した低位段丘面」という記述は『土村誌』の中には見当たらなかった。柏市文化課にも問い合わせしてみたが、「記述の根拠となるものは確認できませんでした。恐らくですが、土地勘のない読者にもわかりやすいよう、土村誌の記述をもとに地理的説明をしたのではないかと考えられますが、詳しくは県の教育振興財団にご確認いただければと思います」との回答だった。

しかし、あらためて『紀要』中の「第 39 図藤心陣屋の位置」を見てみると、陣屋跡の位置を示す丸印(オレンジの色付けは筆者)は、陣屋跡の案内板のあるあたりを示している。(写真 16 参照) 執筆者は、この丸印の位置を「大津川に面した低位段丘面」と表したのではないだろうか。

② 「宗寿寺の北約 200m」という点について

次に「宗寿寺の北約 200m」という記述だが、この位置を写真 17 のように『ゼンリン住宅地図』(縮尺 1500 分の一)に示してみると「第 39 図藤心陣屋の位置」を示す丸印と同じく、案内板の北側の現畑地を示す。(尚、『ゼンリン地図』には現在の水路も波線でちゃんと描かれている! (水色の着色は筆者による))

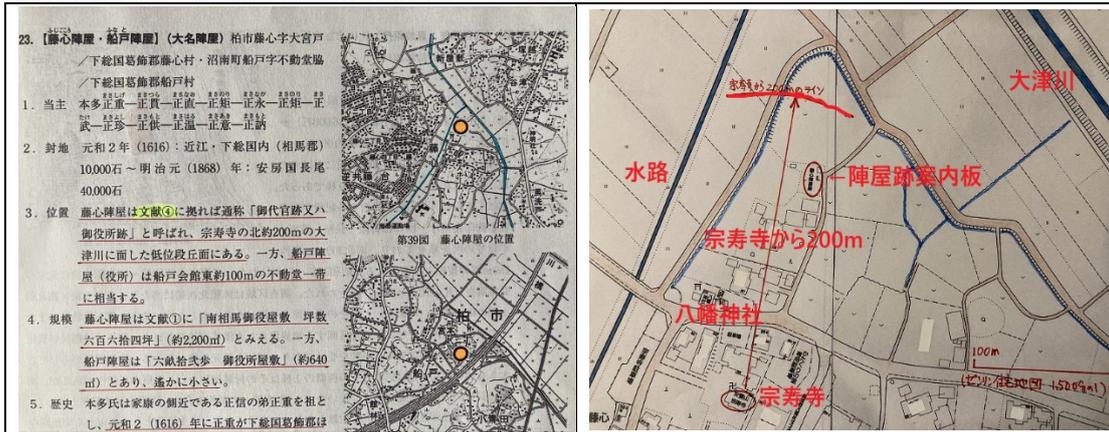


写真 16. 『研究紀要 28』 35 頁より

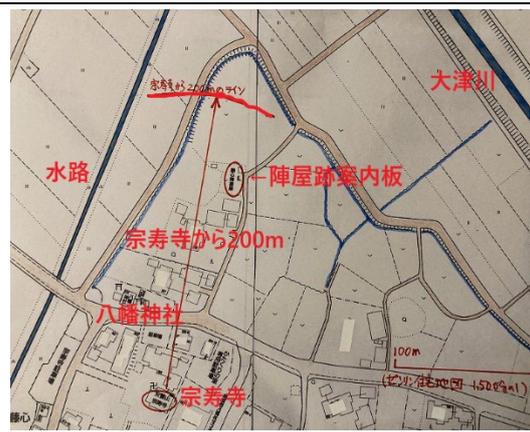


写真 17. 『ゼンリン住宅地図』を基に編集

③ 「低位段丘面」という点

『地名・地理辞典（昭和 58 年 3 月発行版）』では「段丘」について次のような定義となっている。「表面が平坦で、河道や海に面した急崖をもつ階段状の地形。地盤の隆起や気候の変化によって侵食が回春して形成される。平坦な面を段丘面、急崖を段丘崖という。河岸段丘と海岸段丘・湖岸段丘がある」

現地で見ると、藤心陣屋跡の周囲は、段丘崖をもった典型的な河岸段丘には見えない。写真 18 のように八幡神社から大津川に向かっては段丘崖と言えるのかもしれないが、写真 19 のように、大津川に面したほうはほとんど段丘崖とは言えないような状態である。わずかに数十センチ程度は高くなっているようにも見えるが。あるいは江戸時代にはもっと明瞭な段差があった可能性はあるが。



写真 18. 八幡神社下の「段丘崖」？



写真 19. 大津川から案内板方向を見た写真

さらにインターネットで調べてみると、「陰影起伏図」が見れるサイトがあった。
 (下記写真 20, 21 参照) 画像は「Geoshape リポジトリ」を基に一部加工した。

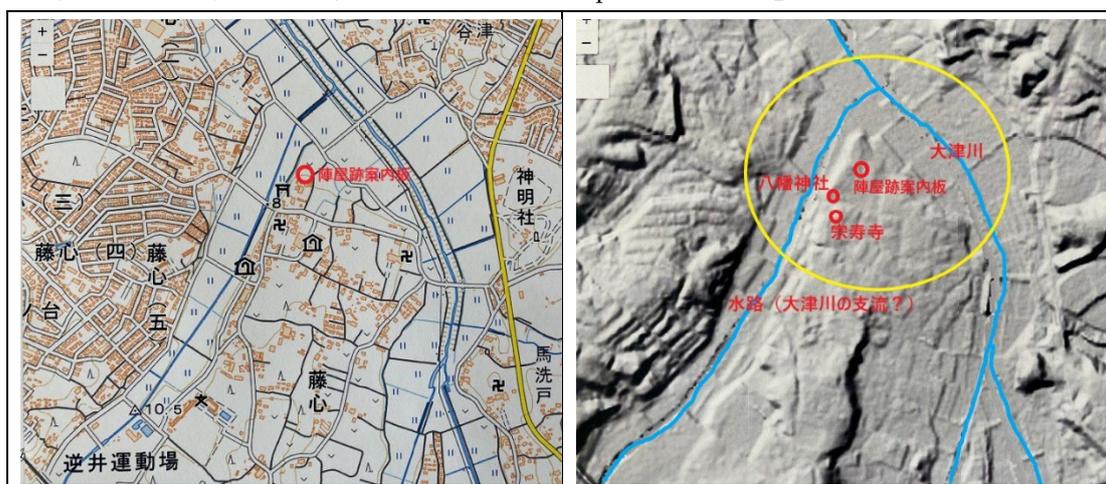


写真 20. 陣屋跡案内板周辺地図 (標準地図)

写真 21. 写真 20 の「陰影起伏図」

写真 21 でみると、陣屋跡案内板のある周辺は、わずかに「起伏」があることが読みとれる。陣屋跡案内板のあるあたりはこの「起伏」の突端にあると言える。この「起伏」を「低位段丘面」と呼んでいいのかどうかはわからないが、「大津川に面した低位段丘面」と表現してもよさそうな地形ではあると思う。

④ 「南相馬御役屋敷 坪数六百六拾四坪」(約 2,200 m²) について

最後に、前回、船戸陣屋跡の位置特定の際にも作成してみたが、「南相馬御役屋敷坪数六百六拾四坪」(約 2,200 m²) を Google マップ上に表してみると写真 22 のようになる。2,200 m² を単純に 50m x 44m の長方形としてみた。規模のイメージとしてみていただきたい。「六百六拾四坪」約 2,200 m² という規模は、現在の畑地と同じ程度の面積であるように見えるがいかがだろうか。写真 23 は船戸陣屋の規模。船戸陣屋は 201 坪、663 m² だから、藤心陣屋のほうがはるかに大きいことがわかる。(多少の縮小の誤差はご勘弁下さい)



写真 22. 藤心陣屋の規模 (イメージ)

写真 23. 船戸陣屋の規模 (イメージ)

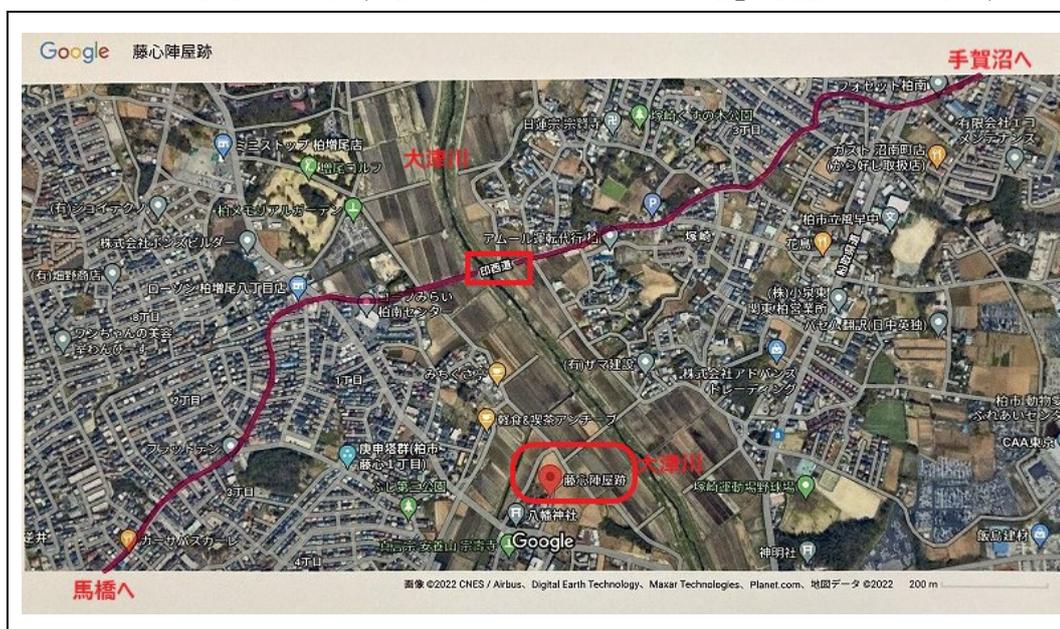
7. まとめ

以上、藤心陣屋の位置について、1.案内板の記述、2.『土村誌』の記述、3.『大津川を歩く』の中の「絵図」に描かれた「堀」、4.「堀」の現地調査、5.『研究紀要 28』の記述のそれぞれについて調査検討してきたが、上記6の中でも述べたように、藤心陣屋のあった位置は、陣屋跡の案内板にもある通り、案内板の北側の「現在、畑地となっているこの場所」であると推定する。

8. おわりに

写真 22 では藤心陣屋跡周辺は季節上、土色になっているが、大津川及び南西からの「水路」（大津川の支流？）の流域は水田になっている。もし、写真 4, 5 の「絵図」にある「堀」が実際に存在したとすると、藤心陣屋は「堀」、水田、大津川と大津川に注ぐ水路（大津川の支流？）に囲まれた、大変立地の良い場所にあったと言えるのではないだろうか。

また、今回は詳しく調査しなかったが、下の写真 24 でわかるように、Google マップには、近くに「印西道」の表記も見える。大津川や「印西道」という交通の面からも非常に条件が良かったと考えられる。（写真では分かり易く「印西道」を色分けしてある）



今後は、船戸陣屋、藤心陣屋、加村台陣屋、そして布施河岸、加村河岸、それらをつなぐ諏訪道、印西道、船戸道などの道路や大津川、手賀沼、利根川、江戸川の舟運なども関連づけて見ていくのもおもしろいかななどと思っている。まだ思い付きの段階だが。（ちなみに上記『研究紀要 28』には、加村台陣屋についても記述がある。『紀要』では「加陣屋（代官陣屋・葛飾県庁）」となっている）